



症状が出なくなっても注意を

気管支喘息ぜんそく

気管支喘息は気道に炎症が続いて刺激に敏感になり、気道が狭くなることを発作的に繰り返す病気です。炎症はアレルギー反応によることが多いと考えられています。

喘息は全ての年齢で発症し、咳や痰が出て、ゼーゼー、ヒューヒューといった音を伴って息苦しくなる発作が特徴です。発作は夜間や早朝に出やすく、特に季節の変わり目の春と秋に症状が悪くなることが多いです。運動、寒冷刺激、感染、特定の薬の服用、肥満などで悪くなることがあります。

喘息の診断は問診や呼吸機能検査、呼気一酸化窒素測定、喀痰検査、血液検査、胸部X線検査などを行います。

喘息は症状が出なくなっても気道の炎症が続いており、また発作が起こります。炎症が続くと気道が固く狭くなり元に戻らなくなるため、炎症を抑える薬を日頃から使うことが大切です。

炎症を抑える治療の主役は吸入ステロイド薬です。適切に使用すれば副作用は少ないです。重症度に応じて量を調整したり、気管支拡張薬などを追加したりします。アレルギーの原因が分かっている場合はそれらを避けます。また、発作が起こったら即効性のある気管支拡張薬を吸入します。

喘息は薬の効きが悪いなどで重症の発作を起こし、命に関わることもあります。薬を使用しても症状が改善しなければ、速やかに医療機関を受診してください。

最後に、通常の治療では発作を抑えることができない難治性のもものについては、抗体療法や気管支熱形成術による治療も行われていますので、専門の医療機関で相談してみてください。

※喘息に対する薬の処方については医療機関・かかりつけ医に相談してください。